

砂糖菓子の弾丸で撃ちぬいて

A Lolipop and a Doll



system is booting up...





I.O.P. Manufacturing Company

Tactical Doll 2nd Generation

Mental model ver.1.0.4 Since 2060



Vector は【目覚める】。体内電圧の安定に 1 2 マイクロ秒。疑似生体部品との同期^{シンク}／誤差補正^{ラグ}に 3 秒。手を握り、開き、関節部の油圧に異常がないことを確認。上半身を起こす。

現状把握。気温 2 6 . 3 セルシウス度、湿度 6 2 %、風量 0。白い天井、白い壁、並べられたベッド……記憶【メモリー】と照合。つまりここは、^{グリフォン}G & K S 0 9 地区司令部内、救護室。視覚情報と G P S からの座標情報を照合、一致。間違いなく、Vector が作戦行動以外の時間を過ごしている場所だった。

【眠って】いたのだ、と Vector は確認する。戦術人形に、生物的な意味での睡眠は本来必要ないが、いくつかの理由で【睡眠】を摂ることがある。

「おはよう」

その声で、Vector は部屋の中にいる自分以外の存在を感知する。着任して以来最もよく聞く男性の声。つまり、指揮官。彼は Vector をコマ 5 秒上目遣いに見て、すぐに手元の仮想キーボードに目を落とし、デスクワークを行なっている。Vector は額に手を当て、息を吐く^{エモート}身振りを^{アビール}見せる。

「放っておいて、と言ったはずだけれど」

「それはできない、といつも言ってる」

このやりとりは 1 4 2 回目。Vector たち戦術人形を武器として扱え、それ以上の干渉をするな、と常に警告しているはずだが、それを繰り返すごとに明らかに効果が目減りしている。別のアプローチを試行せねば

ならない、と Vector は検討する。

「仕事なら指令室でしたほうがいいんじゃないの」

「Vector が目覚める頃だと思って」

「寝顔を見に来たわけ？ そういうの、人間ではヘンタイって言うんじゃないかなかったかしら」

「きれいな顔を観賞するのに良いも悪いもない」

「私、そういう商品^{ドール}じゃないんだけど」

指揮官は黙る。彼の指が仮想キーボードを叩くときの短い電子音^{センサ}が耳を刺激する。

「それで」 Vector は焦れて、言う。「今回の私^{Vector}はどんなやられ方をしたわけ？」



グリフィンの戦術人形は任務に向かう前にメンタルモデルの……^{メモリ}記憶のバックアップを取る。実地の戦闘経験を経た戦術人形のメモリは人間^{マニファクチャ}の手打^{チヤ}ちでは到底再現できない複雑性を持っており、グリフィンはその保持に価値を認めている。戦場でその人形が失われたとしても、司令部のサーバにアップされたメモリを新たな素体に入力すればその損失^{ほてん}が補填できるのだ。

「やられたなんてひと言も言ってないけど？」

指揮官は苦い顔をする。

「私が【眠った】ときの記憶が5 2時間4 1分前。こうして【目覚め】
るまで丸2日の空きがある。他にどんな推測をしとく？」

その複雑さゆえに、メンタルモデルの複製と一口に言っても、ポータルメディアにデータを移すような気軽さで行えるものではない。本体を休眠状態にして何時間もかけてサーバにデータを移行する。これが戦術人形たちにとっての【眠り】の正体だ。

つまり、今の Vector は2日前に、戦場に出る前に眠りについたときの Vector のコピーである。コピーが必要になる事態など、本体を失った場合をおいて他にはない。

「そんなこと聞いても楽しくないぞ」

「楽しい楽しくないじゃないの。必要なの。前回の誤謬^{エラー}を検討して、次はより良く戦わなければいけないでしょう」

Vector はベッドを降り、立ち上がる。

「戦術人形は、そういう商品なんだから」
^{わたしたち}



戦術人形と戦術人形の戦闘は、基本的には数の力による割り合いだ。ダミーリンクシステムで編成された人形の小队たちが、遮蔽物【しゃへいぶつ】もない戦場で真正面から撃ち合う。損耗を前提として前進し続け、相手の部隊をすり潰せば勝利。現代における陸戦のスマートさ、泥臭さとは無縁であり、どちらかといえば近世以前の歩兵戦術時代の戦い

に近い。

ただし、それは使い捨て前提の量産品を相手取る時のセオリーに過ぎない。

映像が再生される。任務記録のためのドローンによる撮影。Vector たちの部隊は山間部の工場を占領した鐵血の人形たちを強襲する。次々と向かってくる鐵血兵たちを撃ち、叩き、鉄屑の山に変えてゆく。

いよいよ敵の拠点を叩く段になり、拠点となっている建物の外に展開していた Vector たちの隊に、突如として弾丸の雨が撃ち込まれる。

倒れたダミーたちの素体を踏みにじて立つのは、明らかに他とディティールの違う鐵血人形。特別製の、^{ワンオフ}、^{ネームド}名有り人形。上等な AI を組み込まれた名有りは、Vector たちを撃ち抜いた快感を味わうかのように口角を釣り上げて笑ってみせる。Vector たちも黙っていない。反撃の弾丸を十字砲火しつつ、すぐさま散開。距離を取り、遮蔽を確保しながら、各々が名有りに対して狙いを定める。

かくして、戦場は熱と鉛の^{ちまた}巷となる。火力、運動性、装甲、すべてにおいて Vector たちグリフィンの人形を上回る名有りの弾丸によって、彼女たちは一体、また一体とダミーを失ってゆく。もはや全滅さえ目前に見えている。

映像の中の Vector はコンテナの裏に身を滑り込ませる。その頭の数センチ上を名有りの弾丸が宙に赤黒い線を引くように飛び過ぎる。Vector の隣には M14 がいる。Vector は自分と同じ名の銃のマガジンを替えると、

M14に何か話しかける。

指揮官はそこで映像の再生を止める。

「Vector」モニタから目を離さない Vector に、構わずに話しかける。「このあと、キミならどうする」

Vector は ^{ハード}脳 内で3秒シミュレートし、答える。

「M14 に自身の突撃を予告。手榴弾の投擲と共に突撃を敢行し、ゼロ距離戦闘を仕掛ける。名有りに ^{Vector}私 を撃たせ、コンマ1秒でも名有りが停止する瞬間を作り、M14 に撃ち抜かせる」

「撃たれることが前提として試算されているのか」

「ええ」

指揮官は複雑な表情をして、映像を再開する。

果たして、映像はたった今 Vector が回答したとおりの展開を見せる。Vector の額から後頭部に、名有りの弾丸が貫通すると同時、名有りのこめかみに M14 の弾丸が吸いこまれてゆく。次の瞬間には、機能を停止した人形……人形だったものがふたつ、土の上に雪崩れるように転がっている。



「ふうん。上出来じゃない」

Vector は映像をそう評価する。

「上出来なもんか」

指揮官はすぐに言う。

「鐵血の占領地の解放。目的は達してるじゃない。それとも、消耗が多すぎたってこと？ 予算の組み方が悪いんじゃないかしら」

「そうじゃない。キミを失って喜べるわけが……」

「そうなってもいいようにバックアップがあるんでしょう。ほら、私ならここにますよ」

「いいや。これでハッキリした。キミは今回と同じ状況があったら100回中100回同じことをする。バックアップが何だ。キミはこの先ずっと死に続けるんだ」

「^{うぬぼ}自惚れないで頂ける？」

という Vector の声はつめたく、苛立ちを含んでいるように響く。「人の形をしたものが壊れるのを見るのが嫌、なんて指揮官のちっぽけな自意識で勝手に騒がないでくれる？ 私の仕事を勝手に指揮官の死生観で歪めないでくれる？ 私は商^{にんぎょう}品としての価値を全うしたいだけなの。武器には武器としての扱いがあるの。壊れるのが嫌だから手榴弾を投げない、なんてバカな話があると思う？ あなた、なんで戦^{こんなところ}場にいるの？ お人形遊びがしたいなら幼稚園にでも行けばいいんじゃないムグ」

早口にまくしたてる Vector の口に、固いものが押し込まれる。味覚に甘味を感知。^{ロリポップ}棒つき飴。指揮官が隠し持っていたらしい。

「キミみたいなのがいるから、僕はここにいる」

指揮官の声は低く、かたくなに響く。

「キミは自分のことを武器だと思い込みたいようだけど、言わせてもらえば、僕から見て、ここの戦術人形の中でキミがいちばん人間臭いよ。自分の存在価値だとか、そんなことに固執するのは、自分の存在について考え、ゆらいでいる証拠だ。そんな存在を、ただの人形だ、なんて放っておくというほうが無理な話だ。別に世界を救う戦いのためにここに来た、なんて大それた話をするつもりはない。たまたま自分のできるところをしていたらここにいただけだ。ただ幸か不幸か、この場所で僕にもやりたいことができてしまったから、そのことについて、それこそキミにとやかく言われる筋合いはない」

そうして、指揮官は端末を閉じて立ち上がり、足早に部屋の出口に向かう。扉の前で、一度振り向く。

「その^{ロリポップ}砂糖菓子、甘いだろう。キミがそれを甘いと感じている間は、僕は自分の行動を改めるつもりはない」



指揮官のいなくなった部屋は、急に熱を失ったかのように感じられたが、^{センサ}Vectorの肌感覚が導き出した数字には、有意差は認められなかった。

棒をつかんで、飴を口から取り出す。戦術人形にとっての燃料は人間とほぼ同じ有機物。特に糖分は燃料効率が良いため、お菓子の

類は多く支給されている。カラフルな渦を巻いたそれを、Vector
は忌々しげに睨みつける。

そうして、Vector は思い出している。記憶^{ログ}の底の底、あの指揮官に初めて出会った時にかけた言葉を。

『まあー……仲良くやろっ……』

仲良く。決して深く干渉せず、ほどほどに、ビジネスライクな関係を結ぶための言葉だったはずだ。

「……仲良く、できないっ」

Vector は砂糖菓子^{ロリポップ}にかじりつき、ガリガリと噛み砕く。人間様と違い、戦術人形に虫歯の心配などないからだ。

砂糖菓子の弾丸で撃ちぬいて

作・春日野土筆

原作・ドールズフロントライン

初出・2018/09/02 こみっくトレジャー